

第2回授業公開 in 新潟大学

主催：教職大学院 共催：教育学部・附属学校部・全学教職センター

2025/8/12

6月6日（金）の2限と4限に第2回授業公開 in 新潟大学を開催しました。2限の時間には附属新潟小学校3年生（授業者：二瓶先生）、4限の時間には附属新潟中学校2年生（授業者：水口先生）に授業をしていただき、延べ158人の学生・大学教員等が参観しました。



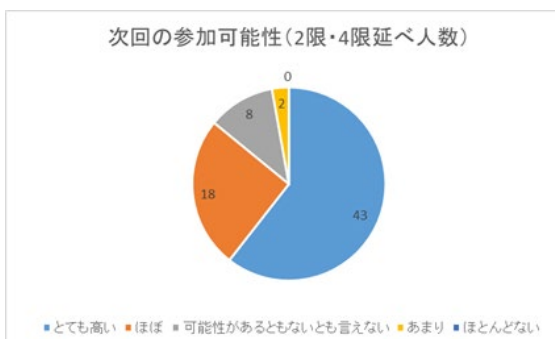
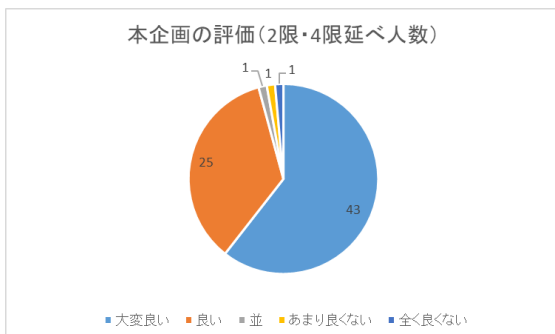
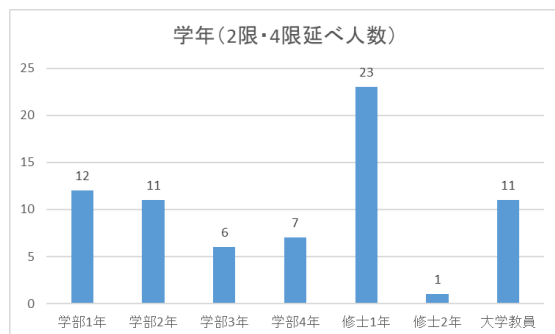
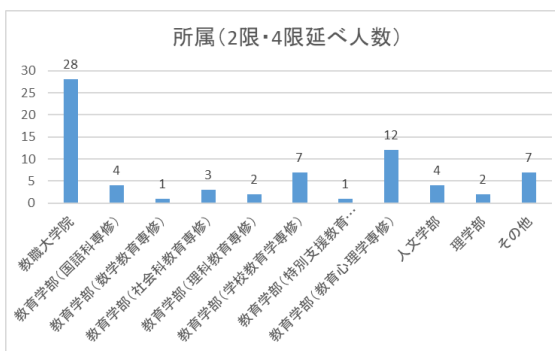
約160名の学生・教職員が参加！

昨年度に引き続き、「第2回授業公開 in 新潟大学」を総合教育研究棟で開催しました。今回は、2限に附属新潟小学校3年生による算数の授業（授業者：二瓶先生）、4限に附属新潟中学校2年生による国語の授業（授業者：水口先生）でした。教職大学院講義『授業における学習研究』『概念変化と学習過程』を学部生や大学の教職員にも開き三ア社を募ったところ、2限に78名、4限に80名の学生・教職員が参加してくださいました。2限の授業後には、教職大学院の阿部先生、4限の授業後には教育学部の足立先生も交え協議会を行いました。協議会では、教職大学院の学生を核に学生間で小グループを作って授業について語り合った後、専門教科の大学教員・授業者と共にパネルディスカッションを行うという形で進行了。なかなか授業を見て自分の言葉で語るという機会が持ていない学部生にとっては貴重な経験になったのではないのでしょうか？また、授業者や教科専門の視点から授業の見方のポイントや学びや教授行動の背景にある意味について語られたことが、観察参加実習や教育実習などの学びに活かされることを期待しています。

2022年12月に出された答申『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～においても、教職大学院と学部との一層の連携強化をすることが重要であり、学生の相互交流等を推進し、理論と実践を往還させたり、教職の魅力が伝わる機会を設けたりする等の取り組みをすることが求められています。教職大学院と附属学校部、教育学部、全学教職センターが連携し実現した本企画はまさにこの答申において求められていることを具現化させたものであると言えると思います。

授業者の二瓶先生・水口先生、協議会に登壇して下さった阿部先生、足立先生を始め、本企画のために多く方からのご支援をいただきました。誠にありがとうございました。

アンケート結果！！



〈自由記述(一部抜粋)〉

指導案に沿ってやるのが全てでは無いと学んだ。最初は児童が進めていく展開に驚いたが、授業で理解して欲しいポイントがどんどん出てきて、児童主体の授業展開になっていて素晴らしいと思った。【教育心理学専修2年】

私が、今まで受けていた授業から、授業の型というものにすぐとらわれているということが分かりました。とても自由な形態で、けど確実に生徒は学びを得ているところがとても面白く興味深かったです。視野を広く、自主的な学びを与えられるようにもう少し自由でぶつとんだ授業を考えてみたいと思いました。【教育心理学専修2年】

子どもたちが「分かる」も「分からない」も言える環境が作り上げられ、子どもの発言を中心に授業が作られていることに刺激を受けました。そもそも、小学生の授業風景を見ることはなかったので、子どもたちがいきいきと自分たちの力で授業を熱心に参加していて衝撃でした。【国語教育学専修1年】

待つ授業の実践を見ることが出来て良かったです。今後の授業実践で生徒に考えさせるような授業をしようと思っています。その時、こちらのサポートのタイミングなどに悩んでいたため、大変参考になりました。【教職大学院1年】

観察をする時に、先生 or 子供ではなく、先生の視線という視点を得ました。また、説明をしなくとも、子供の発想や学ぶ力であそこまで授業が進んで行くことに驚きました。9月の観察実習では得た視点にも注目して参加したいと思います。【学校教育学専修2年】

「主体は子ども」そのことを感じた時間となった。現場にいらると、「ここまでは進めない」「整合性のある課題とまとめにしないと」と、子ども目線とは思いつつも、教師目線で授業の進度を気にしながら授業をしていた。しかし、教師ができるだけ話さず、思考が深まる教材を準備するという「足場かけ」を行うことで、子どもたちが自分自身で授業をつくりあげていく過程を直接感じられたことが非常に良かった。実際に教師と子どもたちで織りなす空間、空気感の中に身を置くことで、現在学んでいる理想とすべき授業を肌で感じる事ができたことは大きな学びとなった。【教職大学院1年】

授業者からのメッセージ



〈自由記述〉

読みに困難さをもつ子どもを想定しながら、どうすると授業に参加できるかを考えていました。中学校の授業を参観する機会がほとんどなかったので貴重な機会になりました。【教職大学院教員】

いい授業とは、子ども達が喜んで議論する声掛けや展開ができることなのだと思います。関係ないところに意見が広がったら修正し、さらに掘り下げていくことで、子ども主体で授業を展開できることがわかった。【学校教育学専修2年】

先生の授業の進め方や生徒の考えを理解しようという姿勢に感心しました。また、最後の協議会では先生の講義での定義不足や生徒の考えを流してしまったところに着目して質問していて、細かく見ているところに院生の凄さを感じました。【教育心理学専修1年】

「生徒の声を拾うのが難しかったことで、逆にそれが授業の肝だったと気づいた」という水口先生の言葉を聞いて、先生がどれだけ子どもたちの反応を見ながら一緒につくっていく授業を大事にされているかが、よくわかった。計画と違って前時までの定着度や子どもたちの反応などを見ながら授業の進め方を変えることが、あのような子どもの深い学びに結びつくだとわかった。【教育心理学専修4年】

自分自身学校の授業を被験者ではなく他者の視点から見るのが初めてであり様々な学びが多くあった。授業の柔軟性や目標となるゴールの位置づけの大切さなどがあった。また、終わったあとに院生の方のお話との際自分が思っていたのが他者からしたら違う視点があったりなど自分一人では到底思いつかなかった考えが多く身につけることが出来た。【教育心理学専修2年】

中学校の実習（英語科）を終えて直後の授業参観でしたので、授業展開のイメージを持ちながら参観することができました。特にグループワークを、グループで話し合わせて終わりにしない、全体共有や教師の手立てに工夫があり、参考にしたいと思いました。【人文学部2年】

子どもたちが自分の考えを語り、それに対してこの視点ではこうなる、といった議論がとても印象的で、そうなるためには教材はもちろん、子どもの問いや困り感がどこにあるのか、その上で教師がどう子どもたちに問いかけ、支援していくのかということがとても大切だと感じた。【教職大学院修士1年】

授業は難しい…

でも、だからこそおもしろい！

二瓶 亮・新潟大学附属新潟小学校

「授業は生もの」とよく言われます。同じ教材でも、反応は子供によって変わります。だからこそ目の前の子供だったらどんな反応をするだろうと考えて教材を用意したり、発問を考えたりします。しかし、一生懸命準備した授業であっても、教師の想定した通りに授業が流れないことはよくあることです。それを教師がどう捉えるかが大切です。

今回の授業は、一見すると指導案通りにいかない授業だったかもしれません。しかし、私はあえて「指導案通り」だったと強く言いたいと思います。子供たちがあの45分で考えていたことは、私が想定したねらいからは一切外れていませんでした。展開の順序は変わりましたが、あの教材を通して学んでほしいと思っていたことは全て子供から出てきました。そういう意味で、「指導案通り」だったので

す。想定が甘かったことは間違いありませんが、提示された教材を3年2組の子供たちらしい視点で見つめ、教材に自分から働き掛けていました。こんなに素敵なことはありません。また一つ、子供の姿から学ばせてもらったという思いです。教育実習や日々の授業でも、授業が指導案で構想した通りに流れていったかということではなく、本時や単元のねらい、子供の学びといった、少し高い視座から授業を見つめていくことを大切にしたいものです。教師の思い通りに授業を進めるのではなく、子供が見つめる先に教師のねらいが重なるところを探してみてもどうでしょう。すると、「授業観」が少し広く豊かなものになるかもしれません。改めて、子供の学ぶ姿から授業を見つめ直してみませんか？

言語感覚を磨く国語科の授業

水口剛志：新潟大学附属中学校

みなさんが国語科の授業において大切にしたいことは何ですか。

私は、国語科の授業において大切にしていることは「言語感覚を豊かにしていくこと」です。「この表現は相手にどのように伝わるか」「自分の気持ちを表現するにはどの表現がふさわしいのか」「この表現はどのような意図で使われたのか」などを考えることは、人と人とのコミュニケーションを考える上で最も基本的で、大切にしていかななくてはならないことだからです。

日々の授業での言語活動の設定はさることながら、教師がどのように言葉に関わっていくかも忘れてはなりません。授業でどのような問いかけを行うか、生徒の発言に対してどのように問い返すか。また、何気ない生徒とのやり取りも言語感覚を磨いていく貴重な機会となります。国語教師にとって授業とは、授業の時間だけでなく、生徒との関わりそのものなのかもしれません。



Q&A



Q：子どもが発言しているときに先生がしゃがんでいたが、意図はあるか。

二瓶先生が授業の中盤で、入り口側の子供のところに移動していたように見えたが、その意図が分かるといよいにおもった。

A：いくつか理由がありますが、教師がしゃがむことで教師の存在感を薄くするという意図があります。授業は子供が主役です。教師の存在感を薄めることで、子供たちに自分たちが主役なのだと暗に伝える意図があります。

基本的には、授業中は子供が何を考えようとしているかを見取るということ、子供が学びに向かっているかを見取ることに注力しています。おそらく、そのいずれかのために移動しているかと思っています。

Q：似たような質問があったかもしれませんが、児童が説明している時に、「こっち」や「ここ」「これ」などの表現が多く、説明がわからない人がいたように見えたのですが、そういった時、捕捉などをするべきなのでしょうか。

A：子供たちの反応や表情から、必要だと判断すれば補足をしたり、「『こっち』ってどのことを指しているの？」などと繋いだりするとよいと思います。

Q：授業で「それは違うよ！」という声が上がると、生徒が自分を責められているような気持ちになっていないか心配になりました。間違えてしまった生徒へのフォローについて教えていただきたいです。

子供に委ねることができる背景には、安心して授業に参加していいと感じられる学級経営があるのだと思います。その点に関して、大切にしていることがあれば教えてください。

A：まずは全体に対し、「一度受け止めることの大切さ」を伝えるとよいと思います。「でも、そうやって考えようと思った〇〇さんの気持ちは分かる？」などと、寄り添うような問い方をしていくことが考えられます。さらに「〇〇さんのおかげで立ち止まるきっかけになったね」などと価値付けることで、間違いはただの間違いではなくなります。また、一人一人の考えが異なるからみんなで学習することっておもしろいということを明示的に伝えたり、日頃から教師がおもしろがろうとしたりすることも大切にしています。

Q：提示した問題が③の問題から提示したのは、どのように判断して③から問題を提示したのでしょうか。会話の中から①、②の過程を達成できたと判断したのでしょうか？

A：問題③を提示する前の子供たちの対話の中で、たしかめ算の話題（問題②を出す意図）が出てきていたため、①②の内容をあえて扱う必要はないと判断しました。



Q：「先生が説明しない授業」と仰っていましたが、課題やまとめを書くことはないのでしょうか？振り返りたい時に振り返れないと思いました。

A：前提として「課題とまとめ」は教えたり説明したりするためにあるものではないと考えています。課題とまとめが必要かどうか、教師の経験や学級の実態によるかなと思っています。課題とまとめのよさの一つとして、授業の型ができることが考えられます。授業に型があった方が、教師が授業をやりやすかったり、子供にとって型があることで学びやすかったりすることであれば、課題とまとめをやることには賛成です。一方で、子供の頭の中は常に変化しています。問いもどんどん変わっていくものです。子供の学びをより柔軟に捉えることができる授業の形を、教師が見付けていくことが大切かなと思います。

Q：附属でない学校で今日の内容を扱う時には、どのような授業をされるのかお聞きしたいです。

A：今回の問題でいえば、実態に応じて提示する問題の口の数を減らすことが考えられます。最初から問題①を提示して、少しずつ問題構造の理解を促していくといったあたりでしょうか。それでも授業の中で、教師が行うことはあまり変わりません。あくまで子供の反応をよく見て、子供たちの反応や気になっていることなどを取り上げていきます。

Q：ゲームで単元を通して授業を行っていたとおっしゃっていましたが、どういったゲームでどんな意図があったのか。そのゲームを通して子どもに付けた力など教えていただければ幸いです。

A：遊びながら学ぶということを大切にしています。3年2組の中にも、算数が苦手な子供はたくさんいます。そういった子供たちにとって、遊びながらいつの間にか算数の内容に触れていたという展開は非常に合っています。また塾に通っている子供にとっても、塾で学習していることがそのまま使える授業ではないことで、退屈せずに楽しく学ぶことができる内容になっています。私が扱う算数のゲームには正解がありません。例えば、わり算とあまりのあるわり算の導入では、ブロックつかみどりゲームを行いました。つかんだブロックの数が、班のメンバーでピッタリ分けられることができればポイントゲットというものです。ピッタリ分けられる場合と分けられない場合の違いが話題になることで、わり算やあまりのあるわり算のしくみへとつながります。また、ピッタリ分けられなかった場合のポイントの付け方も話題になります。ここでは、最適解や納得解は存在します。ここで付けた力は、ざっくりいうならば、正解のない問題に自分たちの既存の経験を基に立ち向かい、自分たちで解をつくり出す力でしょうか。

Q：児童の言葉を積極的に黒板に書かれていたのがとても印象に残りました。教師が視覚的にも補助をされていて、今後の実習等の参考にさせていただきたく思っているのですが、どのような点を意識されて板書されていますか？色づかいにもこだわりがあったように思っていますが、いかがですか？

A：板書は、子供の思考の跡ができるだけ残るように板書しています。子供の発言を残すのも、子供の中で学びのストーリーができるように、考えと考えがつながることを期待してのものです。色づかいに関しては、基本的には白、問いは赤、子供の発言やまとめにつながる言葉などは青、その他の強調はオレンジ（黄色）、子供の感情に関わる内容は黄色と考えています。ただ、今回の授業のように、対比的に表現すると理解が進むかもしれないという場合には、対比するために赤と青で色分けすることもやっています。

Q：本時の学びが子どもたちに落ちていないと感じるとき、その対応の仕方を知りたい。

A：授業は45分だけで完結するものではありません。その次の時間でフォローしたって構いません。また、長い目で子供の学びを見つめることも大切だと思います。例えば、2年生でかけ算九九を覚えていないから3年生のわり算ができないということがよくあります。だからといって3年生のわり算を理解できていないとするのはいささか乱暴です。あくまで3年生のわり算では、わり算はかけ算の逆算で答えを求めることができるということを理解することが大切なのです。したがってかけ算が苦手な子には九九カード等を渡したって構いません。九九カードを渡しても答えを求められない場合は、わり算の仕組みを正しく理解できていない可能性があるかと判断して、その状態に応じた支援をすればよいのです。同時に、かけ算九九を覚えるためのフォローも少しだけしてあげるといいと思います。

Q：子供たちの規律面に関して、とても自由度が高い印象を受けました。近年(?)言われているような、子供主体の授業をするためには(子供たちが自由に自分の考えを言い合える環境のためには)その辺りはトレードオフなのでしょうか。

A：どの部分を「規律」と捉えて自由度が高いという印象をもたれたのかについてお聞きできていない中で回答するのは難しいところもありますが、子供が子供らしく学ぶことができる環境を整えるということについては自由度が高いかなと思っています。例えば、解放したとき、机で椅子に座って学ぶ子もいれば、床で寝転びながら友達と対話しながら学ぶ子もいます。そういった選択は子供に任せています。自分が学ぶやすいところで、方法で学ぶことを保障しています。黒板に出てきて学ぶこともその一つです。黒板は教師が書くものという認識を壊し、子供たちに解放するようにしています。

授業づくりに「チャンス・チャレンジ・チェンジ」

富田一志：新潟大学教職大学院

今回の授業者である附属学校の二瓶先生、水口先生の授業を参観して、一番強く心に思ったこと、それは授業づくりに『チャンス・チャレンジ・チェンジ』です。

お二人が実践した授業は、小学校算数、中学校国語という学校種・教科の違いこそあれ、両方とも「児童生徒が探究する」時間でした。この実践を参観した皆さん、私は「チャンス」だと思います。

令和に至った現在でも、多くの学校現場において、授業研究は「指導案の再現性や妥当性」に主な関心があり、振り返りでは、ある教師行動（発問や指示など）が指導案の再現性や妥当性を担保するものだったのか、教科等の知識は満足に定着したのかという部分に議論が向かいがちです。つまり、授業の枠組みは予め設定されていて、その枠組みをトレースすること、そのための教師行動に多くの注意が払われてきました。

もちろん、だからといって私たちは、授業中の児童生徒の行動について関心を怠ってきたのでありません。ただ、予めセットした「お品書き」を即興のごとく臨機応変に変えることへの躊躇や、「指導案通りに流れることがよい授業」といった前提のようなものが、児童生徒中心の学習を具現することへのバイアスになっていたのでは、と経験的に感じています。

ところで、今回の授業後の振り返りで附属学校の先生は、教師行動について以下のような趣旨の発言をしていました。

「教師は、介入によって子どもの思考を妨げない。しかし、授業中一番思考しているのは教師である。」

お二人の実践に、教師行動の少なさを心配した参観者もいらっしまったのかも知れません。しかし、上記発言にあるように、今回の授業公開から、お二人の先生が、いかに児童生徒の「個性」や「思考」に注意を向けているか、また児童生徒の言語や行為による対話を中心に、新しい知を生み出す「探究」をデザインしようと尽力されていたかが伺い知れます。

「探究」する子どもたちの表情は元気で明るいです。難しい課題に出くわしても、たとえ「モヤモヤ」が続いても何だか楽しいです。このことから「探究する」ことは、児童生徒にとって本来「自然な学び」の姿なのであり、児童生徒が「能動的な学習者」として成長するための要件のように思います。

私たち教師は、児童生徒に「主体的・対話的で深い学び」を求めます。ならば、児童生徒が教師に「主体的・対話的で深い学び」を求めることも道理です。今回、お二人の実践から得た学びを「勇気」に変え、子どもも教師も「探究する」学習に「チャレンジ」する。もちろんそれは一朝一夕で達成されることはありませんが、その研鑽の日々はいずれ子どもたちの笑顔に「チェンジ」するはずで。

お二人の先生に感謝しつつ、私も授業づくりに「チャンス・チャレンジ・チェンジ」していきます。

子どもの学びを見つめ、そこから学ぶ教師の在り方

有井優太：新潟大学教職大学院

二瓶先生の算数の授業、水口先生の国語の授業。教科や学年は違えど、2つの授業に共通していたことがあります。それは、「子どもの学びの筋を見ようとしていたこと」です。これは、子どもの学びを大事にし、保障できていたこととも少し意味が違います。もちろん、2つの授業が子どもの学びを大事にしていなかったとも、保障できていなかったとも言いたいのではありません。ただ、学生の皆さんでも、子どもの学びの筋を見ようとするのは教育実習や観察参加実習でもできるということが言いたいのです。

では、子どもの学びの筋を見ようとするとはどういうことか。それは教師が教材を授業づくりのために解釈し、効率的で系統的なルートを逆算したものをただ子どもになぞらせようとするのではなく、子どもが教材に対してどのように学びを切り開こうとしているのかを見ようとして、その背中をそっと押しやり、見守ったりしようとする事です。学生の皆さんは、教科書で担当の授業範囲が割り当てられたらその授業のゴールを定め、逆算し、授業の計画を立てるでしょう。それは当然のことであり、全く悪いことではありません。そして、この過程を一度経ることはとても重要です。ただ、教師は、一度その教材の全体像を理解したうえで逆算して学習過程を構想するのに対して、子どもたちは、そうした全体像なしに自分の既有知識や経験のみで教材にアタックしていくのです。つまり、そこにズレが生まれることは必然と言えば必然なのです。

ならばと、腹をくりただ闇雲に子どもの背中を追っていただけだとそれはそれで共に迷子になっていくことでしょう。この矛盾を克服していくためにはそれ相応の経験と努力が必要です。そう考えた際、学生の皆さんには何ができるのでしょうか。

例えば、観察参加実習のように、現場の先生の授業を参観する際。1つは子どもがどんな学びの世界を切り開こうとしているのかを必死になって追ってみてください。1人の子どもとそこに関係してくる子どもに焦点を当てるだけでOKです。1人の子どもが誰とどのような関係の中でどんな学びを展開しているのか、発言のみならず、指差しや見配せ、表情、その一つ一つをできるだけ詳細追ひ、推察してみてください。きっと1時間本気でそれをするだけでもどっと疲れるはずですが、その経験を積み重ねることで授業をするときに子どもがどのように学ぼうとしているのか少しは見えるようになってくるはずで。

次に、教育実習など実際に自分が授業をする際。まずは、授業前に徹底的に教材研究をしましょう。これは、授業づくりではありません。授業の展開を構想するのではなく、なぜこの教材を学ぶ必要があるのか、この教材の核の面白さ（奥深さ）は何かを必死になって探ろうとすることです。その際に、現場の先生や実習の仲間に相談することももちろんあっていいでしょう。多くの場合、この授業ではこれを分からせなければならぬと思ひ込み、教師の都合でまとめてそれを板書し、ノートに写させるということが起きます。しかし、板書しノートに書くこと、子どもが本当に理解できることは別です。これは、ねらい＝到達点という思想で授業を構想することに起因しています。そうではなく、ねらい＝本時で触れてほしい本質、と捉え授業を構想すると一見、不可解な発言をしている子どもの発言もその子なりに本時の本質に迫ろうとしている姿としてみとることができる授業者の余裕が生まれます。皆さんが今回の2つの授業を通して、子どもの文脈を大事にと感想に書いていることはまさにこうした授業者の在り方に起因しているのです。

いきなり全て、今回見た授業のようにできるようになる必要はありません。今回の2つの授業は、附属学校の教員という学校の先生の中でもトップクラスの授業をする先生たちの授業なのです。ただ、いきなり真似できなくても、その姿にあこがれ夢を追い続けることは皆さんの教職キャリアにとってとても重要な意味を持ちます。そして、これだけは覚えておいてもらいたいと思うことは、そんな附属学校の先生でも、学生に授業を見られているというプレッシャーの中、子どもの学びに学び一緒に学び悩もうとする姿勢を授業中で示そうとしていたことです。いきなり何もかも、完璧にできる必要はないのです。自分の置かれた状況の中でできることを全力でやりつつ、実際に授業を行う際には子どもとともに学び一緒に学びを創ろうとすること、授業後に改めてその経験を振り返りどうすれば次にはより良い学びを子どもたちと一緒に創っていけるかを創造すること。これはただの反省ではありません。次の学びに向けた構想を創造すること、これが教師としての力量を高めていくためにとても重要なことです。今回の授業参観、協議会の経験を是非今後に生かしていくことを期待しています。